

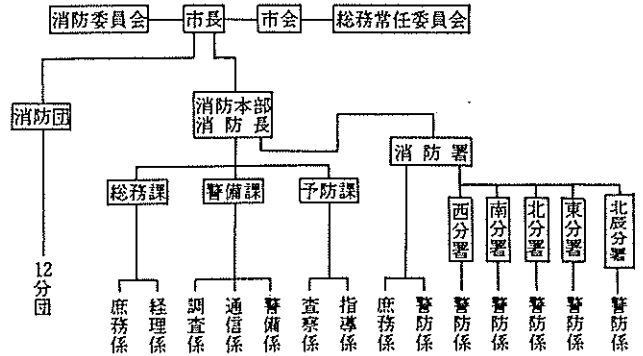
困難な消火活動

市内の消火栓は、公設のもので1,700あまりあります。しかし、断水の時もありますので、貯水池やプールにはいつも水をはっておき、消火に困らないようにしています。

最近では、高いビルが建ちならぶようになりましたので、はしご車やスノーケル車が必要です。石油や薬品の火事では、化学車が必要です。茨木市には、それらの消防車が整備されています。しかし、火事は消火が

困難で広がりがちです。また、市内には狭い道路があり、その上道路に駐車している車があると、消防車が入りにくいことがあります。私たちもこういった問題について真げんに考えてみななければなりません。

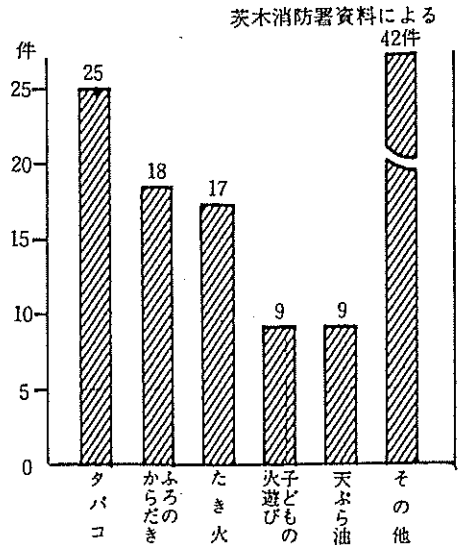
茨木市消防組織



消防機動力(昭和50年) 茨木消防署資料による

種類等	本署	西分署	東分署	南分署	北分署	北辰分署	合計	本部
ポンプ車	1	2	1	1	1	1	7	
タンク車	1	1	1	1	0	0	4	
はんそう車	1					1	2	
はしご車	1						1	
スノーケル車		1					1	
化学車						1	1	
赤パイ		1	1	1	1	0	4	
救急車	1	1	1	1	1	1	6	
職員	26	18	17	14	17	13	105	48

火事発生の原因(昭和48年)



③ 風水害

なやまされた水害

東に安威川、中央に茨木川がほぼ南北に流れていますが、昭和の初めごろまではよく水害をうけました。それは上流の山地に降った雨が両河川に流れこむ水量にくらべて、河川の幅がせまく、しかも堤防が弱かったため

で、一度豪雨にあうとすぐ堤防がきれて洪水の被害を受けました。また、淀川もしばしば堤防がきれ、大洪水の時には茨木方面にまで水がはんらんしました。

室戸大風

昭和9年9月21日の室戸台風の襲来は、茨木地方の民家や学校の校舎を倒壊するほど大きな被害を受けました。とくに、茨木高等女学校では校舎がたおれ、教職員2名、生徒4名が死亡し、校舎の下じきになった者136名、そのうち重傷者10数名を出しました。玉櫛小学校でも児童が1名死亡しましたし、茨木小学校では講堂の屋根などが吹きとんでしまいました。

安威川と茨木川の合流

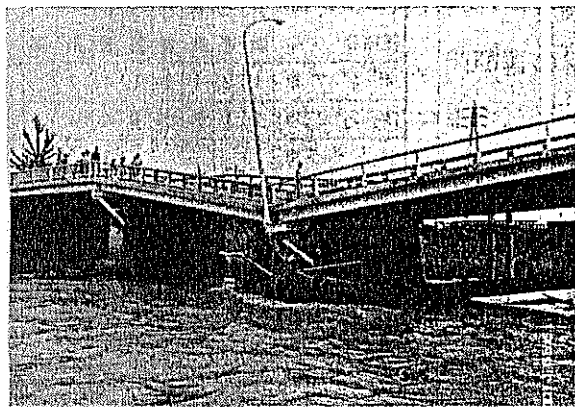
昭和12年(1937年)に茨木地方を水害から守るため、安威川と茨木川を田中付近で合流させました。昭和16年から18年にかけて安威川一帯にわたって改修工事が行なわれました。この工事で、堤防のきれる心配は一応なくなりましたが、降雨が続くと一時的な浸水があちこちにおこりました。

ジェーン台風

昭和25年(1950年)9月3日のジェーン大風は、風速40メートルの暴風が吹き、家屋全壊24戸、半壊40戸、重軽傷者15人にたっし、大きな被害を受けました。

昭和42年7月豪雨

昭和42年(1967年)7月9日、西日本をおそった豪雨のため、茨木市でも死者1名、重傷者1名、家屋の全壊10戸、半壊1戸、床上浸水1,644戸、床下浸水10,670戸一部破損を含めると3分の1近くの世帯が被害を受けました。この時、安威川に



中央でおれた千歳橋

かかっている木の橋は全部流され、千歳橋は中央部が折れてしまいました。これを「昭和42年7月豪雨」といいます。この時にも消防署、地元消防団や地元の人たちが協力して、水害から守るために必死の作業にあたりました。

昭和42年7月 豪雨における水防活動

茨木消防署資料による

分類 作業	水 系	場 所	作 業
河川に対する水防作業	安威川水系	茨木市野々宮、左岸200m決壊	大阪府土木出張所、自衛隊によって築堤作業をする。
		是推橋右岸下流においてくずれる	安威消防団、消防署、地元の人たちで土のう約300俵をつむ
	茨木川水系	春日橋東づめ上流、左岸150mくずれる	大阪府土木出張所、土のう積工法で一応の措置をする。
	勝尾寺川水系	福井中河原橋下流50mの地点から150m決壊	自衛隊、大阪府土木出張所、地元消防団、消防署、地元の人たちによって築堤工法で作業
ため池に対する水防作業		下穂積の竹ヶ池、西方築堤50mくずれる	消防署、消防団、地元の人たちによって、土のう700俵、杭200本で措置
		春日の茨ヶ谷池、増水により水もれ	消防団、地元民によって、土のう積工法を行なう

被害の状況

昭和42年7月 豪雨による被害

災害にあった総数	戸数	12,336戸	
	人数	49,474人	
人の被害	死者	1人	
	重傷者	1人	
	軽傷者	5人	
田の被害	流失	93.1ha	
	冠水	1,400ha	
橋りょう流失		10か所	
堤防決壊		10か所	
住宅の被害	全壊	戸数	10戸
		人数	41人
	半壊	戸数	1戸
		人数	4人
	一部破損	戸数	11戸
		人数	45人
床上浸水	戸数	1,644戸	
	人数	6,496人	
床下浸水	戸数	10,670戸	
	人数	42,888人	

昭和42年7月 豪雨の被害分布図

